

利根川



VOL.29

2006 8月発行

利根川水系農業水利協議会
群馬県支部情報紙

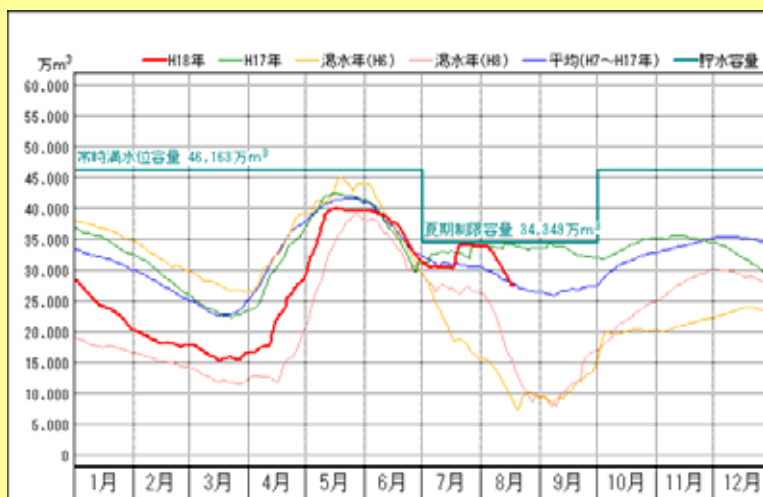
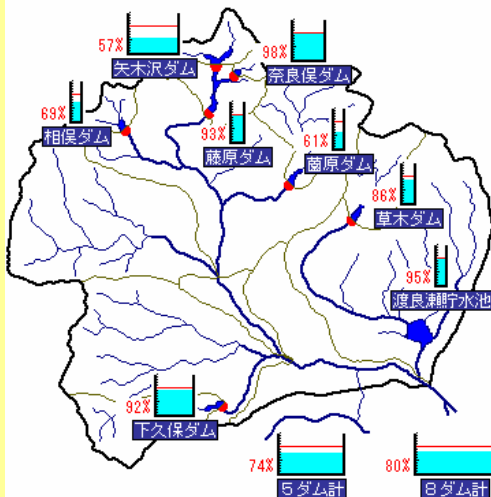
編集・発行 利根川水系農業水利協議会群馬県支部
〒371-0837 群馬県前橋市箱田町350
027-251-4105

URL:<http://www.kakasi.or.jp/tonesuk/tonesuk.html>

平成18年8月現在の水源情報について

8ダムの貯水状況

2006年08月18日09時現在



予想される向こう3か月の天候

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

この期間の平均気温は平年並か高いでしょう。3か月降水量は平年並でしょう。

8月 天気は平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は平年並か高いでしょう。降水量は平年並でしょう。

9月 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は平年並か高いでしょう。降水量は平年並でしょう。

10月 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は平年並か高いでしょう。降水量は平年並みでしょう。

みどり
広めよう! 土地改良区の愛称「水土里ネット」

ダム情報一覧表

平成18年8月18日 09時		矢木沢ダム	奈良俣ダム	藤原ダム	相俣ダム	菌原ダム
有効貯水量	万m ³	11,550	7,200	1,469	1,060	300
現在貯水量	万m ³	6,605	7,090	1,370	735	183
貯水率	%	57	98	93	69	61
流入量	m ³ /s	17.48	2.05	2.89	4.83	8.40
放流量	m ³ /s	64.12	5.33	55.25	2.94	5.44

平成18年8月18日 09時		下久保ダム	草木ダム	渡良瀬貯水池
有効貯水量	万m ³	8,500	3,050	1,220
現在貯水量	万m ³	7,827	2,615	1,161
貯水率	%	92	86	95
流入量	m ³ /s	7.87	51.90	
放流量	m ³ /s	9.72	9.30	

平成18年8月18日 09時		5ダム計	8ダム計	平年値	平年比
有効貯水量	万m ³	21,579	34,349		
現在貯水量	万m ³	15,983	27,586	27,710	100%
貯水率	%	74	80		
流入量	m ³ /s	35.65			
放流量	m ³ /s	63.63			

ダム放流量、発電放流量、総放流量の5ダム計、8ダム計とは

矢木沢ダム、奈良俣ダムからの放流は藤原ダムに流入しますので藤原ダム、相俣ダム、菌原ダムからの合計放流量を5ダム計としています。

また、この5ダム計に下久保ダム、草木ダム、渡良瀬貯水池の放流量を加えたものが8ダム計となります。



草木ダムの弾力的管理試験の実施について

1. ダムの弾力的試験とは

ダム貯水池の有効活用として、ダムの目的のひとつである「洪水を一時的にダムに貯める洪水調整」に支障を及ぼさない範囲で、洪水に備えて空けておく容量（洪水調節容量）に一時的に水を貯め、時間をかけて放流することにより、ダム下流の河川の水量を通常年よりやや多くすることで、河川環境の保全や向上に役立てるものです。

洪水の発生が予測された場合は、通常年と同じ洪水調節容量を確保するため、速やかに一時的に貯めた水を放流し、安全に貯水位を低下させます。

2. 草木ダムの弾力的試験の内容

目的

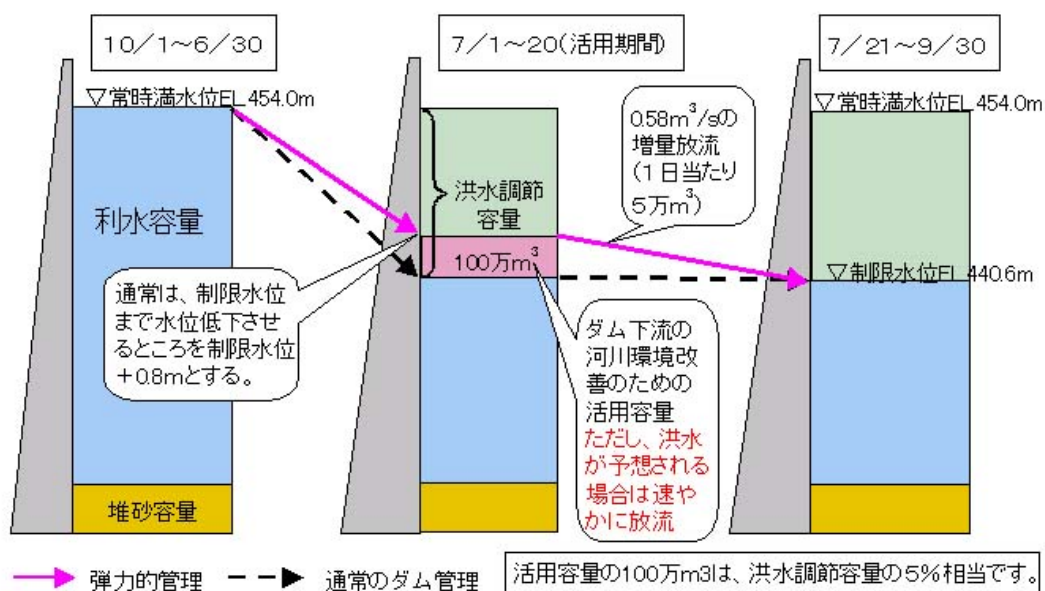
渇水などにより、ダム下流の河川に必要とされる量が少なくなる時期において、ダムからの放流量を増加させ、河川環境の保全と向上（渡良瀬川の流況や河川景観の改善）に役立てることを目的としています。

実施内容

河川環境の保全と向上に役立てるために増加させる水量は、6月から7月にかけて洪水調節容量を確保するために、ダムの貯水位を低下させることを一時的に最大100万立方メートル（活用容量）の水を貯めておきます。

貯めた水を7月1日から7月20日までの間に最大毎秒0.58立方メートルの増量放流を行い、河川環境の改善と向上に役立てます。

この試験の実施期間中に洪水が発生すると予測される場合には、治水の安全性を確保するため、速やかに洪水調節容量内の活用容量を放流し、貯水位を低下させます。



平成18~20年度の
3年間程度
試験を実施

本格運用

特定外来生物「カワヒバリガイ」について

★	名称	カワヒバリガイ
★	学名	<i>Limnoperna fortunei</i>
★	目科	イガイ目イガイ科
★	原産地	中国中南部、香港、台湾、韓国、タイ北部



この貝は中国南部やタイなど、東アジアから東南アジアにかけて広く分布して生息していますが、日本では1990年に木曽川の一つ揖斐川で最初にみつき、1991年に西湖で確認され、その後、琵琶湖をはじめ、宇治川、淀川でも見つかっています。

群馬県内では、2005年に用水路で異常発生していることが報告され、この発見は木曽川水系及び琵琶湖・淀川水系に次ぐ全国3例目であり、東日本では初の事例でした。

この貝は2年ほどで成長し、2～3cmほどの黒い2枚貝です。ムール貝に似ていますが、食用にはなりません。

また、暗いところが好きで、足糸（そくし）と呼ばれる糸をだして石やコンクリートなど固い物に付着し、貝どうしではダンゴ状に付着していたりします。

この貝が増えると、水路の内側に大量に付着することで、必要な水量が流れなかったり異常な繁殖力で本来の生態系を壊してしまい「環境問題」となります。

毒性はなく人体に直ちに影響することはありませんが、コイ科魚類に寄生して衰弱させてしまう、腹口類吸虫の中間宿主になることが知られています。

なぜ、県内の用水路に生息していたのかは不明ですが、魚類の放流の際に水と共に幼体が混じていたか、貝類や土砂などに付着したまま持ち込まれた可能性が高いそうです。駆除に関しては、水路のトンネル内に付着した貝を人力で掻き出し焼却する方法をとっていますが、大変な労力が必要となります。

稲の害虫「イナヅマヨコバイ」について



成虫は体長3mm～4.5mmほどで、体は淡黄色ですが前翅には和名どおり褐色のM字型をした「稲妻」模様が縦に走っているのが特徴です。稲の刈株に産み込まれた越冬卵は春先に孵化した後、麦やスズメノテッポウで成育し、関東では年間3～4回発生するとされています。

幼虫・成虫ともイネの茎などに口吻を差し込んで汁を吸うほか、畏縮病などイネの伝染病を媒介するので害虫として扱われます。